

その七 京都

電話番号を教えてもらってからは、多くて週一、少なくとも月一で美英子に電話する。腹が立つ事に彼女の方から電話してきたのは、去年の夏、北海道から帰ってきた次の日だけ。美英子からすれば電話代を節約するために番号を教えてくれたのかも知れない。同じ大阪市内だから料金は知れてるけど。

会話は楽しい。と言うよりは冗談ばかりで中身は薄い。脈がないのなら諦めるが美英子には魔力がある。それは旅行中に送ってくる、絵はがきではなく手紙。旅先の香りをたっぷり染みこませた便せんに流れるような大人の文字で紀行文をよこすのだ。

「アホや」と口癖みたいに言うが真正正銘のアホなら書けない文章。いい意味でイメージが狂う。そして「心の旅」シリーズで風景写真にちよつとした添え書きをするとき大いに参考になる。もう二度と電話しないと思ってもダイヤルしてしまう。

いつも断られるのに二十回目（数えたことはない大体それぐらい）のデート申請をしたのが一昨日。ついに承認された。うれしくて守にその事を漏らすと快く車を貸してくれた。

自宅近くでカーステレオを流しながら選曲や話題を考えていると窓を叩く音がする。慌てて降りる。

その七 京都

「お待たせ……よいこらしよつと」

大きな紙袋と魔法瓶を受け取ると慎重に後部座席に置く。白地に細い青横縞の長袖のシャツにダークブラウンのタイトスカート。もう少し短い方が……そして真つ青で高そうなシヨルダ―バッグ。スッピンではないが化粧は薄い。それなのにキレイ。助手席に座つて微笑む。去年の冬の神戸のコンサートから数えて十ヶ月振りに見える彼女はまるやかに見える。

——肥えた？

他に変わったところと言えば金歯がひとつ増えた事。俺の観察力つて、とても鋭いのだ。こは「お菓子ばかり食わずにちゃんと歯磨きしろ」と言いたかったが、こらえる。

行き先は紅葉真つ盛りの京都。とにかく出発！

*

大覚寺ダイカクジと言えば大沢池オオサワノイケと広沢池ヒロサワノイケ。

大沢池は中国の洞庭湖トウテイコをなぞつて造られた日本最古の庭園池。尼寺アマデラを包む竹やぶに静寂を与えるこの池は太陽の光でさえ緑色に変えてしまうから不思議だ。

広沢池は遍照寺ヘンショウジ山麓に立ち上る秋の煙によくマツチする。後背の竹やぶは嵯峨野サガノそのもので、嵯峨野の生命いのちはこの池で育はぐまれている……なんて言う話はほんの少しだけ。とにかく会話が楽しい。波長だけでなく周波数まで合うというか、お互い突っ込むしボケる。突っ込み勝負は三対七ぐらいで分が悪いがどうでもいい。

その七 京都

「ウチ、働いてるんよ」

「洋裁学校へ行ってるんと違うんか？」

「ううん。洋装店で働いてる。洋裁見習いって言う感じやね」

「さすが抜け目ないな。腕を磨きながら、給料、もうてるんか」

「そうではありませぬ。ウチ、ドジヤから、失敗した分、給料から差し引かれて結局、足が出て授業料払うてんのもと同じなん」

「元の木阿弥か」

「そう。元々足、短いから、足、出ても元に戻るだけなん」

「またまた、ご謙遜を」

「そうや。ご謙遜や。本当はうまいんやから」

「せやろなー。短大で二年、卒業して半年。足かけ三年もやったら……」

「でもねえー、足、短いと、うまいこと足、かけられへんから、なかなか上達せーへんの。慰めるわけではないけど話題を変える。」

「なんで四大（四年制の大学）に行けへんがったんや？」

「うーん……」

「珍しく間を置く。」

「なんぼウチの家が金持ちでも四大に行ったら破産してしまうからなのです」

その七 京都

「そんな事ないやろ」

「大^{オホ}ありよ。ウチみたいなアホ、入れてくれる大学いうたら、入学金、滅茶苦茶高い。プラス裏口入学金払^{ハロ}たら、ウチの家、ペッチャンコや」

俺の流し目を察知したのか、急に怒り出す。

「胸もペッチャンコやて言いたいんでしょ！」

「何も言うてへん！」

「目が大^{オホ}声、あげてる」

「目が……？」

「そうや。耳、ふさいでも、よう聞こえる」

一方的な口撃^{コウゲキ}が始まる。防がなければ……。

「マア、マア、そのうち膨らむやろ……」

「もう手遅れや！ 成長は完全に止まったん。同情せんといて！」

美英子はゴリラのように胸元を叩く。

——あかん。防御失敗。何とか話題変更しなければ……

「花嫁修業で短大へ行ったんやろ？ 四大で遊ぶよりエエやんか」

「ほんまは……えーと……嫁入り道具を減らすために行ったんよ」

「どういうことや」

その七 京都

「教養やんか。どっころしよと嫁入り道具、持っていくの重たいし金もかかる。身体に入れたいら、荷物減つて楽やし、役に立つやんか」

なかなか含蓄ガンヂクのある言葉。思わず頷く。

「なるほどなあ。けど教養は頭に入れるモンや」

「えっ！ そうなんや。どこでもエエから身体に入れといたらと……思ってた」

照れ笑いしながら真面目に反省している。

「せやな。頭に入れんと役に立たん。えーっと、身体のどの辺に入れたんか忘れたけど、探し出して頭に入れ直さんと」

隙あり！ ここは反転攻勢。

「身体に入れるんやったら、あれもか？」

「えっ、あれって……まだ頭に入れ直してへんから、意味、よう分からへーん」

*

龍安寺リョウアンジと言えば石庭セキテイと相場は決まっているけれど、むしろ衣笠山キヌガサヤマの裾フサでゆったりと構える寺全体に趣がある。閉鎖的で緊張感に満ちた内庭よりも木々と苔と岩が織りなす散在的な外庭の方に安らぎを感じる。特に秋は落ち葉の道が歩く方角を教えてくれる。そんな道を恋人同士のように歩く。しかし、手を繋ぐわけでもなく会話の内容もほど遠い。

「生け花で一番気持ちエエのは、前の日に生けたつぼみがパッと咲いた時やね。家中走り回っ

その七 京都

てギャンギャン言いまくるんよ」

「走れるほど広い家なんや」

「マラソン、でけへんけど、つぼみがパツと咲くなんて感激もんよ」

「ふうん、美英子もつぼみみたいや。パツと咲いてや。立ち枯れしたらあかんで」
美英子は立ち止まって両手を頭の上で組む。

「これ、つぼみのポーズ」

モダンバレエをしていたせいとか様になっている。

「咲かせて見せますわ」

「さぞかしキレイ……今もきれいやけど『点点点』」

「何やの！ その『点点点』は」

声は怒っているが顔は笑っている。

「昔から言うやんか。美しさを保つ秘訣は心を磨く事。ウチ、毎日タワシでゴシゴシ磨いてるん。せやから大丈夫」

「ほんまに？」

「ウソやと思うてるん？」

「ほんだら、ハーって、息、吐いてみ」

「ハー」

その七 京都

「クサイ！ 秘訣はニンニクやろ」

「ばれたか。きのう餃子食べすぎて鼻血ブーなんよ。何とかして」

「やっぱり立ち枯れやなあ」

*

御屋敷町から宇多野、そして高雄。グルッと回って保津峡・清滝へ。奥行きと深さを湛えた美しい眺めが連続する。これらを結ぶ道をフラワーロードと呼ぶのはNHK特番「シルクロード」の影響かは知らないけど道路の至る所に花壇（花のオアシス）がある。遠方の紅葉に花壇の遅咲きの菊が鮮やかな対比を見せる。

「ストップ！ 止めて！ ここで写真、撮ってえ！」

撮影ポイントはいくらでもあったが乗ってこなかった。俺のカメラは最新型の一眼レフ。シヤッター速度をオートにして被写界深度の深い広角レンズをつければそれなりの写真が撮れる。絞り込めば人物と背景の両方にピントが合う。ぶれるリスクは高まるがバカチョンカメラに変身する。でも逆らってまで撮ろうとはしなかった。心の奥に何かが、それは恐怖に近いもの、少なくとも了解がない事は避けた。

美英子は車を降りると鼻歌交じりに花壇の前で微笑みながらポーズを取る。

「プロに撮してもらうなんて、緊張するわ」

親に許しをもらったような気分でカメラを構える。ところがプロであることをすっかり忘れ

てフィルムを巻き上げてなかった。慌てて巻き上げてシャッターを押す。不手際に気付いたのか……

「念のためにもう一枚。シャッター押す前に『チーズ』って言ってや」

ところが自分で「チーズ」と言つて微笑む。シャッターを押すと思いきつて提案する。

「ツー・ショットしよう」

三脚を取りに車に戻ろうとすると付いてくる。

「見合い写真に男はいらん。それより、腹、減つた。お昼にしよ」

紙袋と魔法瓶を取り出すと花壇の淵に座つて弁当箱を膝の上に乗せて蓋を開ける。そしてニコリ顔で俺を見つめる。

「すごい！」

「好きなモンから食べて」

箸を持つがどれから食べようかと迷う。

「ウチは好きなモン残して最後に食べるん。マモルは？」

箸を落としそうになる。初めて「マモル」と呼ばれた。初めて右頬だけに笑窪えくぼがあるのに気付いた。驚く俺に美英子が目を細める。

——今日という日を大事にしなれば！

「うまい！」

その七 京都

「頑張ったもん」

瞬く間に弁当箱がほぼ空になる。昆布コブ巻きを摘まもうとすると突然箸が割り込んでくる。

「これ、最後に食べようと思ってたん！」

昆布巻きを箸で突いて確保する。その迫力に身を引く。

「ごめん」

美英子は突いたまま持ち上げる。

「半分こ、しよか」

口に運ぶと啜えて目を閉じる。

——半分こ？ 半分に噛み切れということか

まるで目の前で裸になって「抱いて」と言われているような急激、過激な挑発に心臓がドキドキする。

——見合い相手じゃないと突っぱねたのに……躊躇チユウチヨするな！

俺たちが座る花壇は道路の緩やかなカーブの角にある。だから目の前を車がブレーキ音を立てながら通り過ぎる。それでも美英子は目を閉じたまま。

——成り行きとは言え、なんでこんなところで？ キスなら車の中でなんぼでもできる

「好きなんやろ。全部食べたら」

まるで目覚まし時計に頭を叩かれたように美英子がパッと目を開ける。何事もなかったよう

その七 京都

に昆布巻きを弁当箱に戻す。

「お茶、忘れてた」

そう言えばとにかく食べた。美英子は魔法瓶マジビンの蓋フタを開けると照れ笑いする。

「やだー。紙コップ、忘れてきた」

その蓋に新商品として出回り始めたばかりのお茶のティーバッグ（高いらしい）を入れて湯を注ぐ。湯気とともに香りが漂う。美英子はティーバッグのヒモを摘まみ上げてクンクンと匂いを嗅ぐ。

「いい香り……」

蓋を差し出す。

「そっち側から飲んで」

首を傾げる。

「ウチ、反対側から飲む。間接キスになるから」

——何、言うてんねん。直接しようとしたくせに
と思いつながらも平静を装う。

「せやけどお茶、残ってたら一緒や」

「どうしよ」

「少し残して飲むんや。残ったお茶、口、着けたところから、捨てたらエエねん。消毒にもなる」

その七 京都

「頭、エエ！ と言いたいけど、そんなんしたら、すぐ、お湯なくなるし、ティーバッグ、出がらしになっちゃう」

美英子は滴を垂らすティーバッグを見つめる。

「せやな。魔法瓶は図体の割に入る量、知れてるもんな」

「まあ、間接やったらエエか。一緒に飲も」

昆布巻きを食べて俺の飲み残しのお茶を飲み干す美英子をマジマジと見つめる。

*

京都の社寺は陽が落ちるかなり前に門を閉じる。賑やかなのは西京極付近だけで、それ以外は憂愁の風を漂わせるだけ。暗くなると祇園が賑わう。

健全なデートを続ける俺たちは京都をあとにして国道一号線に出る。京都南からの国道沿いには色とりどりのネオンを掲げたモーターが続く。美英子が「ひとつ、ふたつ……」と指を折る。

「ウトウトする」

——まさか。キスをパスして直結攻撃？ 男子の戦術やないか

運転がおろそかになる。冷えてきたので窓を閉め切ると寝息が聞こえてくる。

会話はほとんどが冗談。俺自身、冗談で身構えしなれば喋れないから、そのようなパターンになったのかも知れない。男と女の会話は冗談で進める余裕が必要だと自己弁護する。ただ

その七 京都

分らない事がある。どこからが本当でどこからがそうでないのか——本心じゃないと分かってても境界がよくわからない。ところが美英子には分かるらしい。どの言葉が本心で、どの言葉が冗談、つまり誤魔化しかが。

喋り達者の美英子は明らかに男慣れしている。日曜日に電話する事が多いが不在のとき少し気になる。

「短大のとき、ウチ、授業そつちのけで習字、華道、茶道、洋裁、料理、モダンバレエのクラブに入ってギャンギャンやってたやんか。卒業したらその頃の友だちに会うのが楽しみなん。青春は今日がクライマックス。明日からはずーっと転げ落ちるだけやんか」

今が一番若いと言いたいのだ。いつも「アホや」と言ってるが、美英子のちよつとしたセリフは結構物事の本質を突いている。字はきれいし文章も料理もうまい。「アホ」やない。今まで女子とはまったく違う。でも守と違つて数人の女子としか付き合つてないからよく分からない。

ところで留守時の電話口での母親の対応が非常にいいねいだ。少なくとも俺の事を悪くは言っていない。と言う事は悪くは思っていない。

——別に他の男と付き合つてもかまへんけど

とにかく美英子のサービスはすごかった。まず弁当。「お粗末様」とペコッと頭を下げる彼女に感激した。それに昆布巻きを挟んでのキスの催促は夢のようだった。

その七 京都

なぜあんな道路端であんな行動に出たのか。ここでキスする勇氣はあるのかという挑発だったのか。でも不自然さは感じなかった。結局何もなかったが後味の悪さもなかった。あのままキスしても問題はなかった感じ。でも何か引つかかる。知秋……そう夏子とも異なる展開だ。引つかかると言うより何故か俺自身の気持ちの方がよく分からない。

——あつ、そうか。夏子！

夏子と初めてキスしたとき全身がケイレンした。それほどファーストキスは衝撃的だ。と言う事は二度と同じ体験はできない。だからすぐ誰かと恋をしたいという気になれなかった。卑屈になったんじゃない。つまり初恋を超える感激を美英子と共有できればと思っても所詮は無理。しかも美英子はあまりにも俗っぽい。下町育ちだから？

*

「ウチって、色気ないん？」

いつの間にか、うたた寝から冷めた美英子の問いかけに戸惑うが、いつもと同じ冗談気味に流す。

「屈んだ時の腰のチラリズム、すごく色気ある」

「えっ！」

少しかがんで背中にも手を回す。

「ほんまや。スリップ着てたから良かったけど、タダ見されるとこやった」

その七 京都

「オッパイやないからエエやん」

「せやな。ペチャンコやし……」

「なあ、『裸、見られたら、その人と結婚せなあかん』って言ってたやんか」

「知床の……あの温泉、楽しかった。また行きたい」

美英子は話を逸らして姿勢を元に戻す。

「ひよつとしてあの時、ウチの裸、見たん？」

「見てへん」

「ほんまに？」

「湯冷めして死にそうやったんやで……けどチラッと見られたぐらいやったら結婚、せーへん

ねんやろ？」

「せやなあ……」

少し考え込んでから笑顔で答える。

「……百回、見られたら……。スタンプ券発行しよか。せやけど、ウチって、裏側にしか色気

あれへんの？」

「表側にあると思うか？」

「思えへん。ねえ、二世君はほんまは何歳やのん」

俺は少しがっかりする。「マモル」ではなく、「二世君」に戻ったからだ。

その七 京都

「同じくらい」

「歳の割に言うてること、アホなことばかり」

「美英子は何月生まれ？」と、かわす。

「四月、四月一日」

「四月バカ。それで、アホやねんな」

「ほっといて。けど、そうや」

「まあ、お互い様やな」

「四月生まれは損やわ。早う歳取るんよ」

俺より一年近く早く生まれている。同級生でも彼女の方が上だと思おうと少し妙な気分になる。

いや待てよ。四月一日生まれって早生まれ？ 学年は上？

喋るのをサボっていると美英子がリクライニングシートを倒す。

「二世君とやったらテレビ見るより面白いし安心やわ……また、眠くなた。家に着いたら起こして。おやすみ……」

——安心？

逆に不安になる。ひよっとして消極的な俺に愛想を尽かしたのかも。冗談ばかり言っているから素直に行動できないのかも知れない。

*

その七 京都

美英子の家に着いた。

「起きろ。着いたで」

ボーとする美英子を見無視して紙袋を降ろす。背伸びしてから美英子はゆっくりと降りる。
「楽しかった。またデートしてな。じゃあ」

美英子はキョトンとして俺を見つめる。

散々絡み合ったけど間接キス以外の接点はなかった。